

宮 倉 遺 跡

1993年12月

島根県江津市教育委員会

宮倉遺跡正誤表

誤	正
2頁	
14. 空山古墳郡	14. 空山古墳群
13~14頁	
第17図加工段状遺構 0 4	第17図加工段状遺構 0 2
23頁12行	
口唇部と体 <u>却</u> との境	口唇部と体 <u>部</u> との境
図版	
遺構に伴う出土品 1	
加工段状遺構 0 4	加工段状遺構 0 2

宮 倉 遺 跡

例　　言

1. 本書は、島根県浜田土木建築事務所の委託を受け、江津市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、島根県江津市二宮町神主イ75-4・イ97外に所在し、字名は、家の前・前宮グラ・宮倉、周辺にはイヤガサコ・ホソリ・殿屋敷・城等がある。調査地は、表記2筆の中である。
3. 現地調査は、平成5年7月7日から同年10月9日まで実施した。遺物整理は、現地調査と平行して行い同年12月24日に報告書作成作業を完了した。調査体制は、以下のとおりである。

調査指導　原 龍雄（江津市文化財研究会長）　三上 巍（江津市文化財審議会会長）　上田 勤（同委員）　宮本 巍（同）　山藤久男（同）
杉井和大（同）　山藤 孝（同）　島根県教育庁文化課文化財係

事務局　山藤通之（教育長）　植田教治（社会教育課課長）　藤田和雄（同係長）　笛木睦子（同係主事）

調査担当者　宮本徳昭（社会教育係主事）　野川真希（臨時職員 遺物整理）

調査作業員　今田八郎　牛尾勝志　植田敬雄　大平正廣　小駿龍夫　田中理博
茶畠正一　中田義美　中西美子　横堀芳香　森本一陽　山崎 進

調査協力者　原工務所㈱　島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター調査第三係

4. 遺物について、廣江耕史氏のご指導を賜った。
5. 本書の執筆・編集・写真撮影は、宮本が行った。
6. 方位は、調査時の磁北を示す。遺構の略称は、竪穴式建物-S I・掘立柱式建物-S E溝-S Dとした。
7. 遺物・図面・写真是、江津市教育委員会で保管している。

目　　次

I 調査経過 1	2. 遺構 4
II 位置と歴史的環境 1	3. 遺物 16
III 調査結果 3	4. まとめ 27
1. 調査の概要 3	図版

I 調査経過

島根県浜田土木建築事務所（以下、事業者）は、平成4年12月15日に県道皆井田江津線道路改良事業に先立ち江津市教育委員会（以下、委員会）に分布調査依頼書が提出された。委員会は、直ちに調査し遺跡の存在を確認後、事業者に平成5年1月14日に回答した。事業者は了解し、同年2月19日に建設省・島根県教育庁文化課を交え4者による実施計画等を協議した。

委員会は、同年5月中旬に江津市財政課と協議した。事業者は、同年6月3日に文化財保護法等57条の2第1項の届出をした。委員会は、同年同月11日に同法第98条の2第1項の通知をした。同年同月23日に事業者と江津市長は発掘調査委託契約を締結した。

現地調査は、同年7月7日から同年10月9日まで実施した。同年9月20日に調査指導会を開催し、「今後の調査に対応できるようにしておく」ことを条件とし、「やむを得ず」と結論が出された。同年9月23日に現地見学会が開催され、約40名の参加者があった。

II 位置と歴史的環境

江津市は、島根県の中央部やや西寄り「中国太郎」の異名をもつ江の川が、日本海に注ぐところに位置している。海岸線は、ほとんど砂浜となっている。山波は大きく2本あり、海岸線に平行している。水系は大きく3つに分かれ、山波の間を網目状に流れている。これにより小規模な耕作地と中規模の平野が形成されている。

本遺跡は、市内西部海岸線の水尻川河口から約2.2km上流の左岸台地（標高21.5～25.5m）に立地している。水尻川により形成された都野津平野の谷頭を見下す台地上である。都野津平野の表層は、水尻川・敬川・江の川・日本海・風により堆積した砂層である。本遺跡は、砂層と土層との接点にある。本遺跡の北の水尻川右岸に立地する半田浜西遺跡は、室町時代に砂により埋没している。また、西の宮谷川左岸に立地する二宮C遺跡は、本遺跡と同様である。

周辺には、縄文時代からの半田浜遺跡等、弥生時代から古墳時代にかけての稻荷山遺跡、青山遺跡等、天ヶ峰古墳・高野山古墳群・高野山北斜面の古墳群等、弥生時代から中世にまで続く占八幡付近遺跡等、古代の窯として棚橋押込窯跡・久本奥窯跡等がある。石見二宮の多鳩神社・式内社夜須神社・半田浜西遺跡がすぐ近くにあり、古墳時代初めから平安時代にかけて当地が主要な地域であったことが窺える。また、神主城跡・神村城跡等とこ



第1図 周辺の遺跡 1:50,000

れ等の周囲には、宝篋印塔や五輪塔が点在しており室町時代を中心として最盛期であった。

本遺跡は、分布調査並びに字名調査により新発見となったものである。所在の地域は、大島義太郎著『二宮村史』にあるように弥生時代後半から連綿と人々の生活が窺え、その傍証となる字名等がよく残っている。字名を詳細に調査する時、かなり遺跡発見の緒となっている。遺跡の宝庫的地域である。

参考文献　門脇俊彦「歴史編（古代）」「江津市誌上巻」1982年

島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター廣江耕史主事のご教示による。

III 調査結果

1. 調査の概要（第2・4図）

遺跡の範囲は、旧江津市立二宮保育所を中心として東西約190m・南北約62mと予想される。遺構が残存していない所は、二宮保育所敷地と同レベルの水田部・溜池である。



1 : 5,000

調査範囲は、道路部分と不滯工事部分である。5段に区切られた畑を高所からA～Eとして、調査区の設定とした。調査結果からは、3段となった。

土層状況は、畑並びに田としたため表土を含む3層が客土となり、遺物は新旧混在していた。遺構面は、地山ないし直上から検出できた。また、溜池堤防下からも遺物・遺構を検出した。

遺物は、弥生時代後半から近代初めまでの物を検出したが、竪穴式住居と柱穴の一部に伴う数点以外は、



第2図 調査範囲（実線）

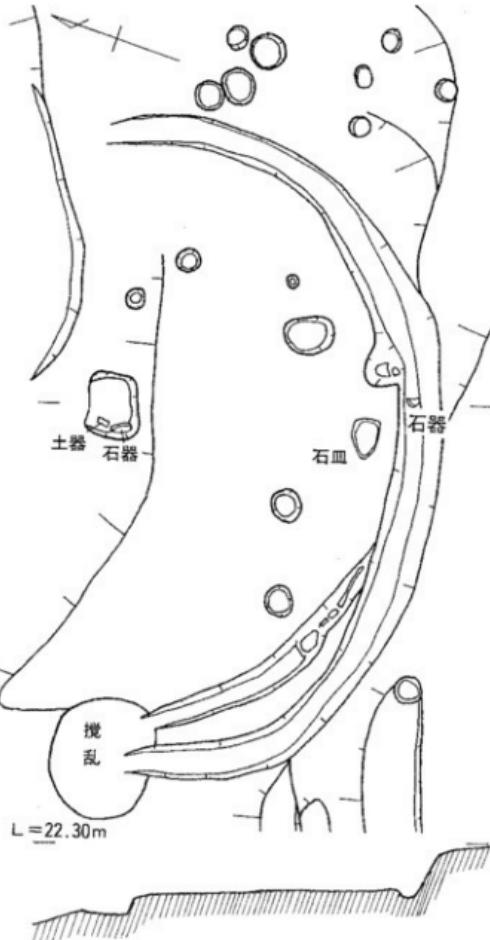
全て原位置を離れていた。遺構は、竪穴式住居 2 基・掘立柱式建物 3 棟・溝 5 条・加工段 3 所・階段状遺構 3 群・柱穴群 3 群等を検出した。

以下、遺構・遺構に伴う遺物、遺構に伴わない遺物とに分け述べていく。

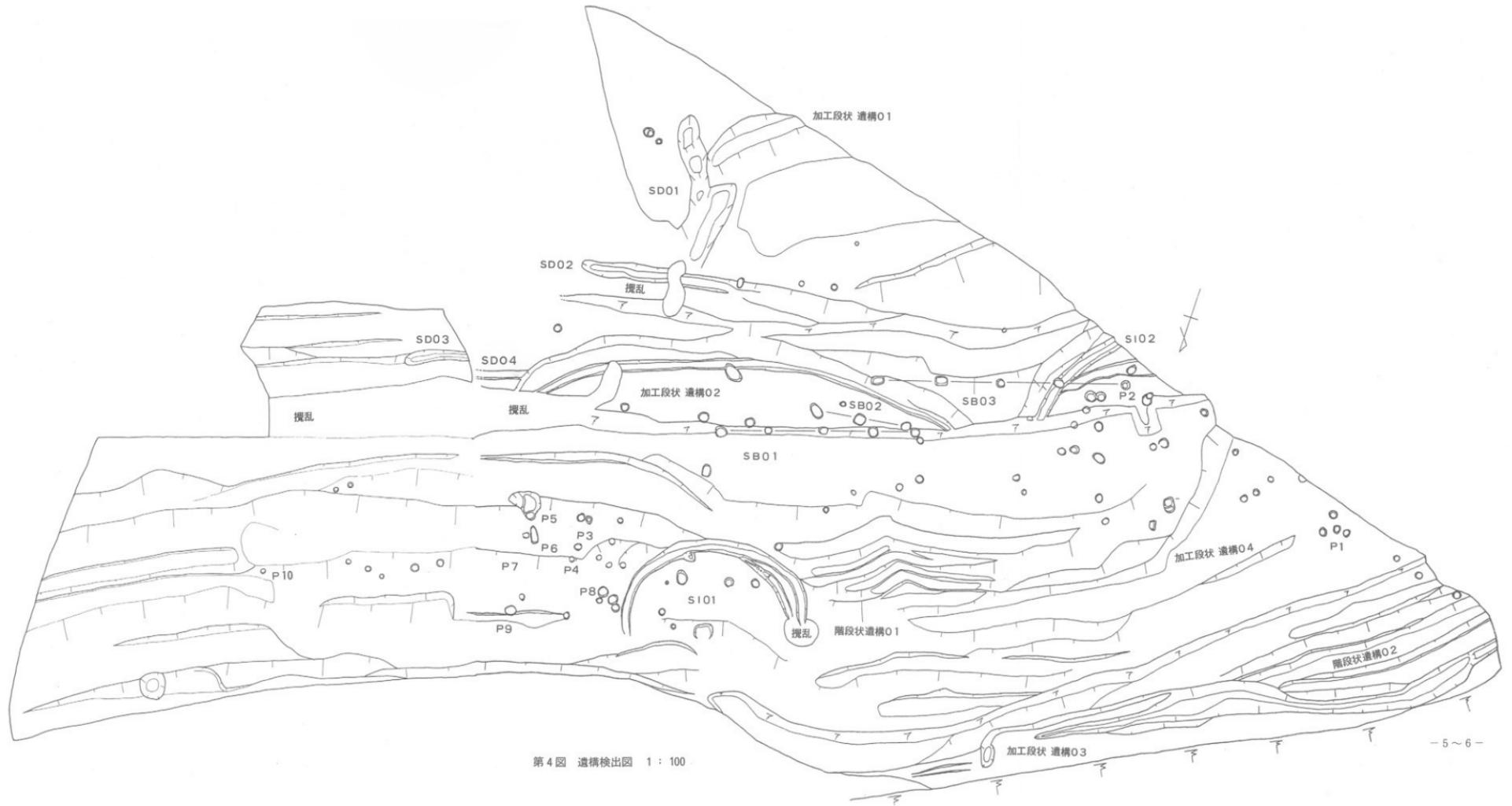
2. 遺構

竪穴式住居

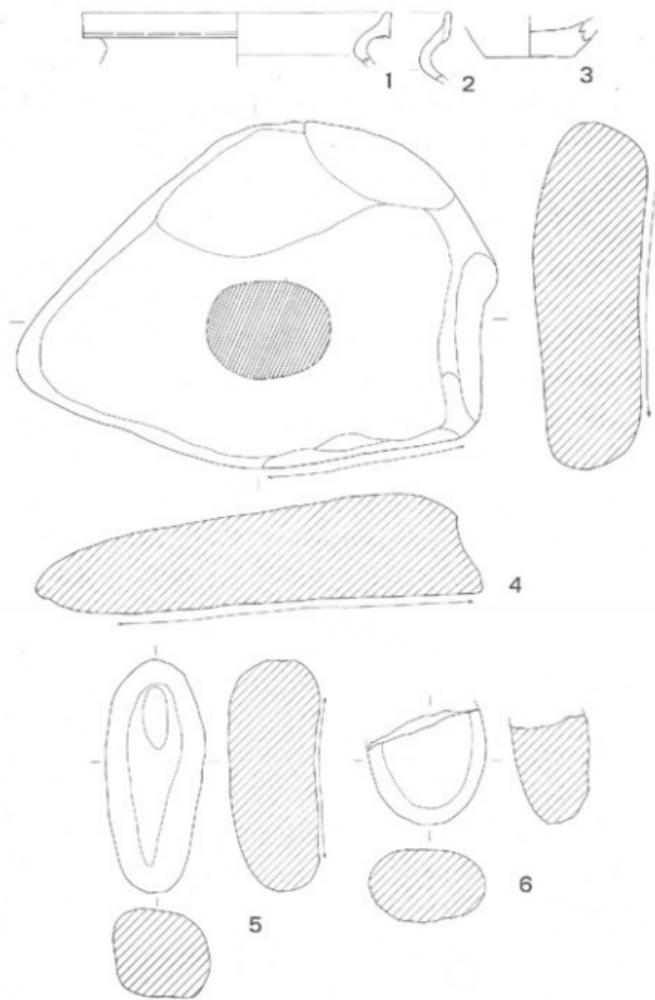
S I 01 (第3図) 調査区中央北端に位置し、耕作による攪乱のため床面積 $\frac{1}{2}$ の検出となつた。全形的に多角形状を呈しているが、拡張前はもう少し鋭角形的な多角形を呈していたと考えられる。検出最大径 5.90m 最高壁高さ 0.40 m・最深溝深さ (対床北) 0.12m、伴う可能性の柱穴は中央のしっかりした 2 穴 (深さ 0.5 m 前後) であろう。拡張前の検出規模 (調査後の検討から不明瞭ながら東側内側にも溝の可能性有) は、最大径約 5.0 m・溝深さ 0.05 m (底は凹凸)、伴う可能性の柱穴は溝に近い 3 穴 (深さ 0.3 m 前後) であろう。床面は、拡張後の面が前の面を下げていると考える。炉状遺構は、どちらに伴うか不明である。南西隅に敲石兼磨石、そばに弥生時代後期から古墳時代初めの土器体部片が出土した。焼土並びに焼壁は、確認できなかつた。



第3図 S I 01 実測図 1 : 50



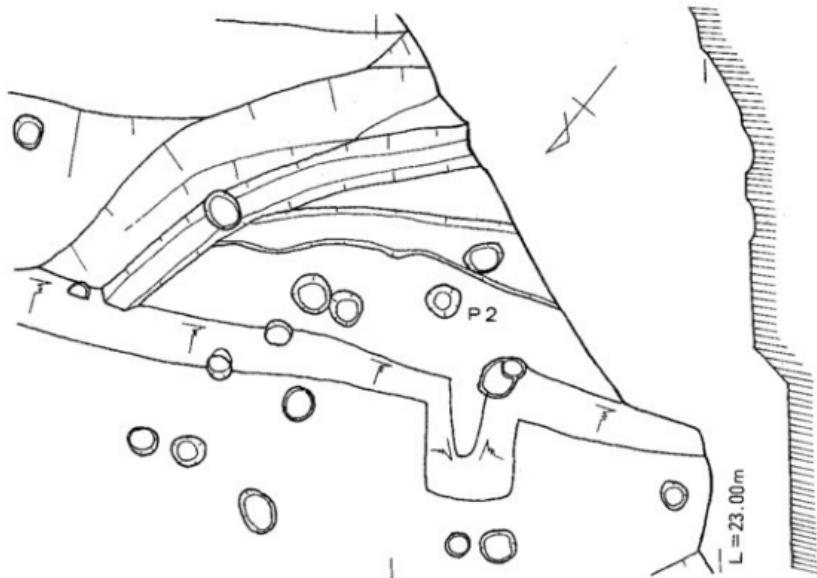
第4図 遺構検出図 1 : 100



第5図 S101出土遺物実測図 1:4

遺物は、土器と石器が伴っている。炉状遺構南側の覆土と石皿上の覆土から炭火物を検出した。炭火物は、繊維質を確認できるようなもので植物の可能性もある。周囲の状況から建物の焼失とは考え難く、関連はないであろう。土器は、東側拡張後の溝上から内側床面

にかけてまとめて出土した。細片化しており原位置を保っていると考える。1は、胎土に1mm大の砂粒を多く含み、黒茶色を呈し、しっかりしたつくりの甕である。口縁に4条前後の凹後、肩に列点文を確認できた。2は、胎土に1mm大の砂粒を含み、外側は白濁・内側は淡黒色を呈する甕である。口縁部の貼付け技法と擬凹線を確認できた。3は、胎土に1mm大の砂粒を多量に含み、外側は赤褐色ないし茶褐色・内側は黒灰色を呈している。底形は、やや歪みがありやや椭円形に近い。共に弥生時代後期以降のものと考えられる。4は、南側床面の原位置にあった石皿である。拡張後の住居址に伴うと考えられる。図示した面は、出土した上面である。全面が使用され、緩い凹面を呈し極部的に打痕が認められる。下側半分の側面は、側面の中でも特に使用されている。下面は、上面よりかなりの凹面となる程使用されている。5は、炉状遺構の底から浮いた状態で土器体部片と共に出土した敲石兼磨石である。全体的に使用されているが、特に図示した対面は、凹面になる程使用されている。6は、南側溝の底から浮いた状態で出土した磨石である。欠損断面を除く全面が使用されているが、図示した対面は不規則な剥離が全面に認められる。剥離は、新しく使用後ないし使用最後の時と考えられる。

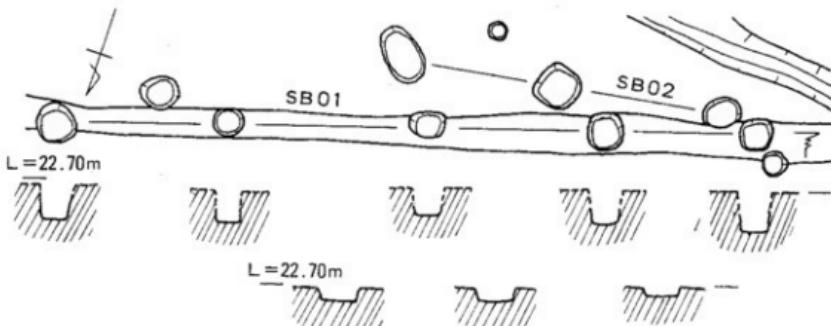


第6図 S102 実測図 1:50

S I 02 (第6図) 調査区中央の西側南端に位置し、耕作による搅乱と調査区域外とから極一部の検出となった。S I 01同様拡張している。両方の平面形は、ともにS I 01をやや直線的なものと考えられる。規模もともにS I 01より大きいと考えられる。溝の状況は、拡張前がやや浅く2~6cmでやや区域外へ傾斜し、拡張後は約7cmで若干北側へ傾斜している。拡張後の溝外側に平坦面が認められることからもう1基別の遺構が推定される。拡張前に伴う柱穴と考えられるものは、P 2が一番可能性があり弥生時代後期と推定される甕の口縁が出土している。P 2は、掘立柱式建物に伴う可能性も充分にある。拡張後に伴う柱穴と考えられるものは、拡張前の溝の中のものと床面最西のもの・段下図上最北のものである。いづれも遺物ではなく、深さは約45cmである。柱穴の中には、掘立柱式建物に伴うものが考えられる。北西方向への舌状突出部は、耕作時の道としての削平残部である。伴う遺物が出土していないため時期は不明であるが、平面形等からS I 01とはほぼ同時期ないしあまり差のない時期と考えられる。

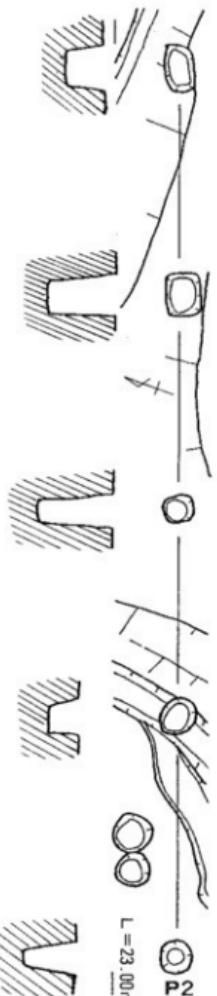
掘立柱式建物

S B 01 (第7図) 調査区中央のやや西に位置し、桁行4間(620cm)、梁間は不明である。梁方向の柱穴は、耕作による搅乱で消滅している。軸は、N-107°-Wとなっている。径30cm前後・深さ30cm前後のしっかりした穴である。伴う遺物が出土していないため時期は不明である。



第7図 S B 01・02 実測図 1:50

S B 02 (第7図) S B 01に接し、2間(300cm)以上を検出した。軸と梁のどちらかは不明である。軸は、N-98°-Wとなっている。平面形は不規則で深さは浅い。伴う遺物がないため時期は不明であるが、深さ等からS B 01よりも新しい可能性が高い。

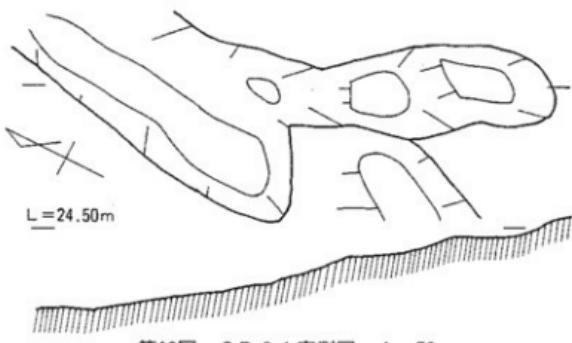


第8図 SB 03 実測図
1 : 50

SB 03 (第8・9図)、SB 02南からSI 02にかけて位置し、桁間4間 (780 cm)・梁間は不明である。北側の柱穴は、他と同様耕作による搅乱で消滅している。桁軸は、N - 107° - WとなりSB 01と同方向である。穴底高さに大きな差があるが、検出状況等から同一建物のものと考えた。穴は、SB 01よりもしっかりしている。西端柱穴P 2の半分の深さから土器が出土した。やや風化しており明瞭ではないが、薄づくりで1 mm大の砂粒を多量に含み灰白色を呈している。頸部に小判形の刺突がめぐっているようである。弥生時代後期に属すると考える。他に1 mm大の砂粒を多量に含み黒色を呈した体部片が1点出土している。土器から弥生時代の建物としておく。

溝状遺構

SD 01 (第10・11図) 中央南側に位置し、階段状の底を呈している。底には、砂が深く堆積していた。砂層上層から土器質土器が出土した。1は、糸切りと見られ、胎土に茶色粒を含んでいた。3は、底部の厚みが均等でなく、穿孔の可能性もある。4とほぼ同型であるが、底が厚く中央が極薄いものが1点あった。



第10図 SD 01 実測図 1 : 50



第9図 P 2 出土土器実測図
1 : 2

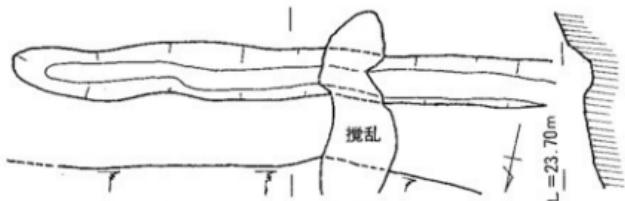


第11図 SD 01 出土土器実測図 1 : 4

SD 02 (第12図) SD 01 の北に位置し、西へやや傾斜している。西側は、耕作による擾乱で消滅し、検出部中央と東側は溜池工事等により消滅している。中央部から西へ若干傾斜している。遺物は、出土していない。

SD 03 (第13図) SD 02 の北東の溜池堤防下に位置し、西側は溜池出水口(道)により消滅している。

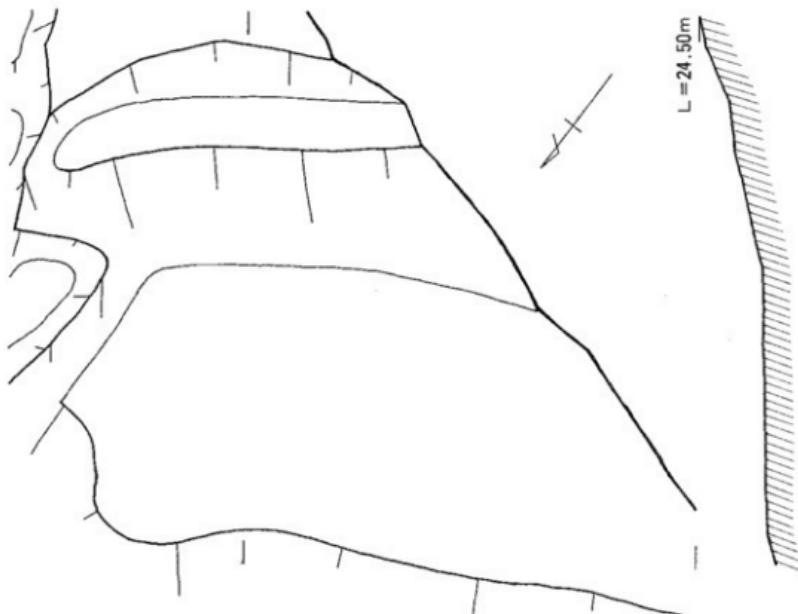
西へやや傾斜している。遺



第12図 SD 02 実測図 1 : 50



第13図 SD 03・4 実測図 1 : 50



第14図 加工段状遺構 01 実測図 1 : 50

物は出土していない。

SD 0 4 (第13図) SD 0 3 とはば平行に位置し、底の高さはやや SD 0 3 が高い。溜池出水口(道)によりほとんど消滅していた。加工段状遺構との関係は、不明確であるが本遺構が新しいと考えられる。遺物は、出土していない。

加工段状遺構

0 1 (第14図) 中央南端に位置し、全体の約 $\frac{1}{2}$ 以内を検出した。北西への緩傾斜に直交するように削っている。テラス・北西平坦面ともに有機的なものと考える。伴う遺物は、出土していない。

0 2 (第16・17図) 調査区中央に位置し、全体の約 $\frac{1}{2}$ 以内を検出した。検出時には不明であったが、西端部と東部に同質の遺構を複合していると考える。西端部のものは SB 0 3 よりも古く、東部のものは SD 0 4 よりも古い。また、東部のものは中央のものよりも古い可能性がある。段下端の浅い溝は、中央のものに伴うと考える。溝の傾斜はほとんどなく、極めてわずかに西へ傾斜していた。溝からは、外面が剥離しているとみられるが薄づくりの口縁部が検出された。器形等は、あまり見られないものである。時期は不明確であるが、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと考える。溝北側の平坦面で検出された柱穴の一部は、この遺構のいずれかに伴う可能性もあり、遺構の性格が変化する。

0 3 (第18図) 調査区北西端から西端にかけて位置し、ほぼ全体を検出した。B-B'西まで、方形の堅穴式住居の残存部状を呈している。しかし、西側のものと一連のものと考える。0 2 中央の遺構同様溝を判うものと考える。溝は、C-C'東まで西へ傾斜し、西側はほぼ平坦で最も深い。C-C'を中心にして大河原石が種々重っていた。伴う遺物は、出土しなかった。

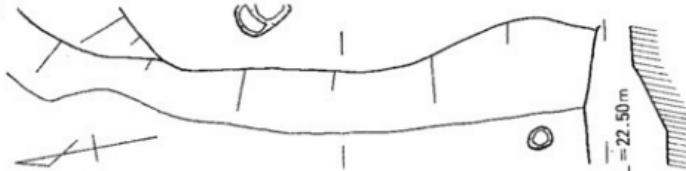
0 4 (第15図) 調査区南端中央西側の SB 0 2 西に位置し、不整形を呈している。全体規模等は、不明である。

北端は階段状遺構に切られている

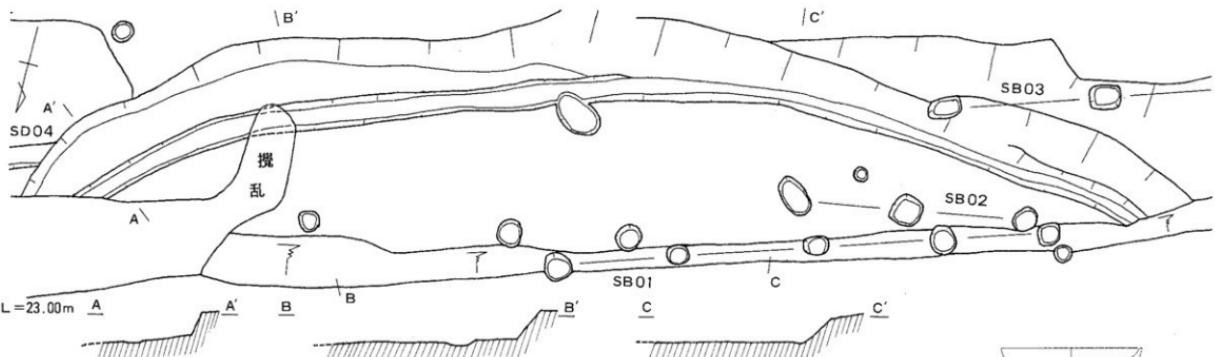
が、一連の

可能性もある。両側の柱穴群との関係は不明である。伴う遺物は、出土しなかった。

調査区北部に 2箇所で加工段状遺構と考えてよいものが見られるが、段差が低いことと

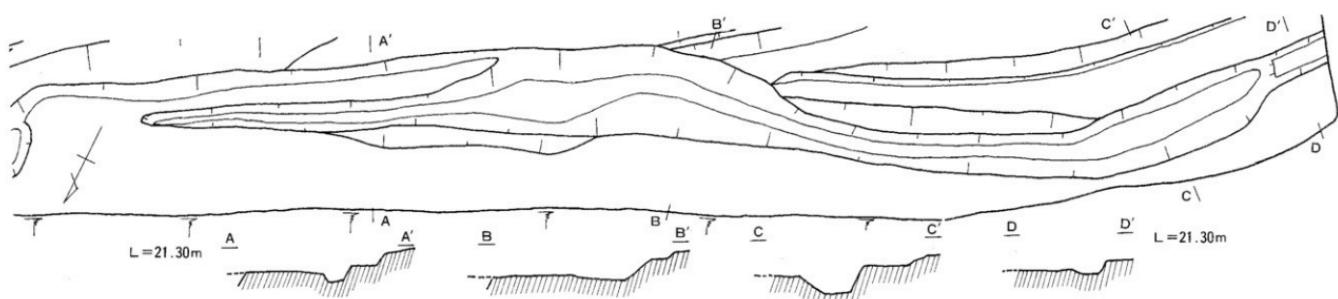


第15図 加工段状遺構 0 4 実測図 1 : 50



第16図 加工段状造構02実測図 1 : 50

第17図 加工段状造構04出土土器実測図 1 : 4



第18図 加工段状造構03実測図 1 : 50

周囲の階段状遺構と同方向であり、明確な区別ができないため取り上げなかった。

階段状遺構（第4図）

01 S I 01 南西に位置し、南東へ登るような形態となっていた。検出段差は、2~8 cmと低い。最下段は、加工段状遺構04につながっていた。伴う遺物は、出土しなかった。

02 加工段状遺構03 西部の南に位置し、南東へ登るような形態となっていた。検出段差は、2~7 mmと低い。加工段状遺構03との新旧関係は不明である。伴う遺物は、出土しなかった。

他に階段状遺構01の北西に位置し、南東へ登るような形態となったものがある。検出段差は、3~9 cmと低い。北西は、耕作により搅乱で消滅していた。伴う遺構は、出土しなかった。S I 01 南東から西側に位置し、南東へ登るような形態となったものがある。検出段差は、2~8 cmと低い。伴う遺物は、出土しなかった。

柱穴群

S I 01 の東と加工段状遺構04西側にまとまりがある。S I 01 の東は、規則性がみられないが半数近くの柱穴内から遺物が出土した。図示できたものは、4柱穴で5個体である（第19図）。P3からは、淡茶色と黒色を呈し1 mm大砂粒を多量に含んだ鉢の口縁部である。P4からは、P3図上とよく似た胴部片である。P5からは、口唇部に2条の凹線があり淡い朱色を呈した甕の口縁部である。P6からは、灰茶色を呈し縦方向の刷毛目を有する肩部である。P7からは、1~1.5 mm大の砂粒を多量に含み、外側は淡黒灰色・内側は淡黒褐色を呈した高壊ないし器台の口縁部である。口唇部外側に1条の沈線が入る。P8からは、明灰白色を呈した甕の口縁部である。口唇外側の上下に沈線とみられるものがあるが、風化により不明確である。以上は、大概弥生時代後半期に属するものと考える。P9からは、薄づくりの外側は黄白色・内側は黄橙色を呈する壺と考えられる口縁部である。弥生時代末から古墳時代初めにかけてのものであろう。P10からは、P8に似たものの胴部と考えられるものである。

加工段状遺構04西側は、2群に分けられるが、共に規則性はみられない。P1からは、検出面（地山面）から数cm下で伏せた状態で土師質土器が出土した（第19図）。体部から口縁部にかけて若干欠失していた。底部は糸切り、口唇下外側には明瞭な稜線がある。



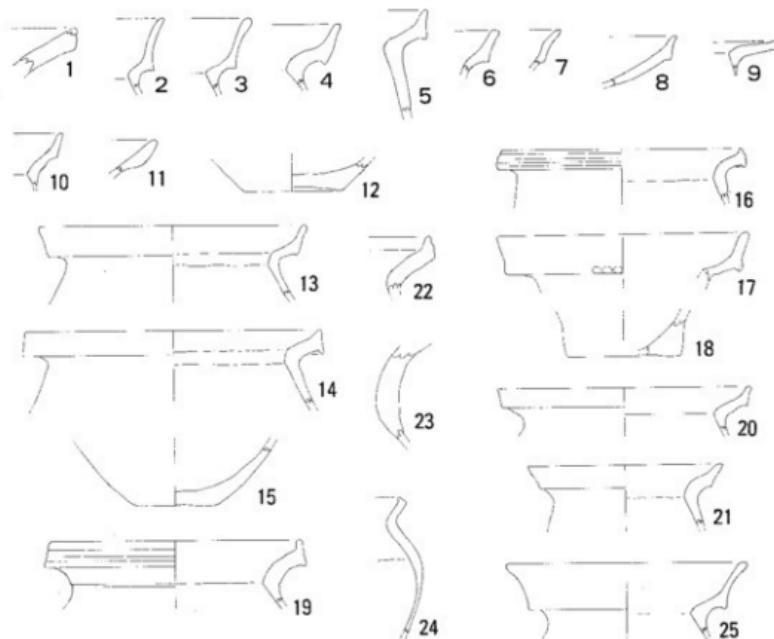
第19図 柱穴内出土土器実測図 1:4

3. 遺物

造構に伴うないしそれに関連する遺物は、造構の項でそれぞれ説明しているので、ここでは造構に伴わないものについて述べていく。

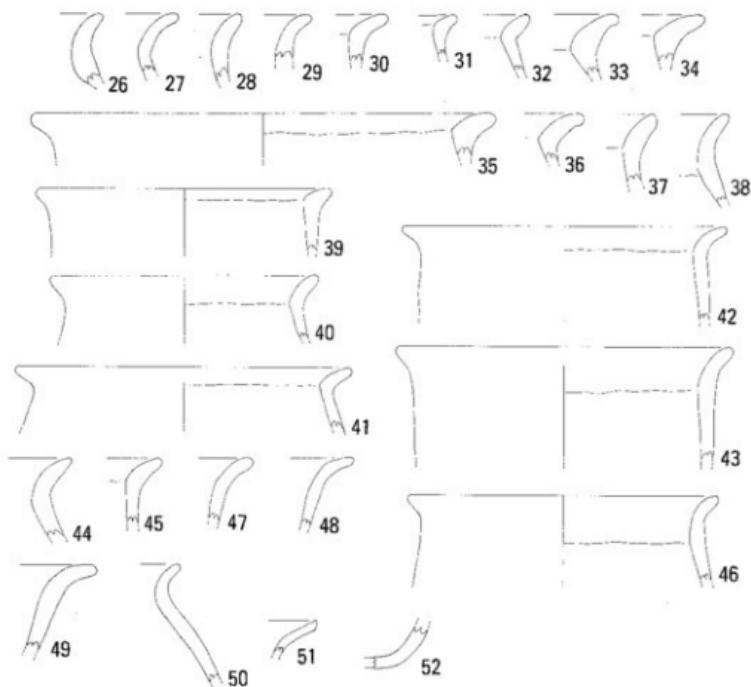
弥生式土器・土師器（第20・21図）

1は、A区の地山に近い層から出土した。1mm大の砂粒を著しく多量に含み、口唇部外側に2条の凹線状のものがみられる。2～9は、B区中層以下から出土した。いずれも多量に砂粒を含んでいる。2は、口縁後下端がするどい。3の外面は、黒茶色を呈している。4の内面は、ケズリを確認できる。5の肩外面に瓜形文と思われるものがわずかにみられる。6の口縁部外面は、凸状のものがみられる。7の外面は、2、3同様に刷毛調整と思われる。8は、体部下側で歪みがみられる。9は、少片であり天地の逆転並びに傾きに誤りがある可能性がある。10は黒茶色を呈し、上層から同類と思われるものが数点出土している。図示できなかったが、口縁部外面で3条の凹線があり下端部がやや突出するもの、下端部が突出し頸部が直線的なもの等である。11は風化が著しく詳細は不明であるが、内面はやや凹面を呈し、外面には凹線の存在を感じさせる。SD 02（B区）付近の検出面からC・D区出土品に同類のものがみられる。12は地山面から出土したもので、外面は淡朱色から黒茶色を呈している。底円周部は、全体に凹凸がみられる。13・14は、加工段状造構02西部分上の表土下から出土した。ともに1～3mm大の砂粒を著しく多量に含み、体部内面にケズリがみられる。14は、口縁部外側に1条の凹線状のものがみられる。同一個体と推定される平底の底部片がある。15は、やや離れたところから出土した。1～2mm大の砂粒を多く含み、内外ともに黒色を呈している。他に微細砂粒を多く含み、やや朱味を帯びたものが2点ある。体部はやや直線的で、厚さは2cm前後・径はやや小さい。16は、加工段状造構02東部分上端付近から出土した。微細粒～1mm大の砂粒を多量に含む。口縁部外側が凹面になったものが1点ある。また、D区出土土器に同類細片が多くある。17・18は、SD 03・04上層から出土した。17は、口縁部外側に刷毛調整がみられ、微細砂粒が多量に含まれている中に朱色粒が少し含まれている。18は、胎土等から17と同一個体の可能性が高い。底部中央は、穿孔を推定させる。19は、階段状造構01中央上層から出土した。頸部の沈線は明瞭である。口径に歪みがある。20は、1～2mm大の砂粒を含んでいる。他に、13・14・19各々に類似口縁部外側に3・2・4条の凹線がみられるものが各1点ある。また、10と11の中間型で他と胎土の異なるものが1点あり、加工段状造構02東部からも1点ある。21は、地山近くから出土し1～2mm大の砂粒を多く含んでいる。3



第20図 出土土器実測図(1) 1 : 4

条前後の凹線の痕跡がみられる。底部細片が数点ある。1 mm大砂粒を著しく多量に含み、厚さ17 mmの径60 mm前後で歪みがみられる。微細砂粒を著しく多量に含み、外面朱味を帯びてていねいなつくりである。厚さ12 mm前後・40 mm前後の径が推定される。22は、1 mm大の砂粒を多量に含み、淡朱色を帯びている。ていねいなつくりで2条の凹線が明瞭である。23は、少し1~2 mmの砂粒を含んでいる。内面ケズリの上部に指調整の凹凸がみられ、外面上端部にヘラないし指による後退式の押え痕がみられる。24は、微細~1 mm大の砂粒を多量に含み、薄づくりのものである。肩に瓜形文の痕跡がみられる。25は、D区北東部から出土し、多量に1~2 mm大の砂粒を含んでいる。しっかりしたつくりである。同類の口縁部や同底部と推定されるものがかなり細片としてみられる。26は、B区から出土した。微細砂粒を少量含んでいる。B区では、他に高环の筒部・鼓形器台片等がある。また、C区側から高环3種が出土している。底径約14 cmの薄づくり、底径約8 mmの筒部の脚部側に円孔があるもの(数不明)、有段の環部である。27・28は、C区表土中から出土した。28



第21図 出土土器実測図(2) 1 : 4

は、多量の微細砂粒を含んでいる。27と28の中間タイプでやや直線的なものが1点みられる。29~31は、加工段状造構0.2西部から出土した。29と同タイプは、もう2点ある。30は、微細砂粒を多量に含んでいる。31の外面は、やや雑な仕上げとなっている。32~43は、加工段状造構0.2東部から溝状造構0.3・0.4の東にかけて出土した。32の内面は、ケズリの後に口縁部の調整をしている。33は、しっかりしたつくりである。34~37の内面ケズリの境目はするどい。36の口唇部外側は、明瞭に段がついている。38は、微細砂粒を多量に含み口唇部は歪みがある。39は、全体に歪みがある。40は、器壁に空洞がみられる。41は、ていねいなつくりである。42は、器壁に凹凸がある。43は、微細砂粒を多量に含み器壁に凹凸がある。44は、大きい歪みがみられる。45の頸部外面は、やや平坦面をなしている。もう1点よく似たものがあり、口唇部にかけてやや平坦面をなしている。46はていねいなつくりである。47は、微細砂粒を多量に含み外面に歪みがみられる。48は、

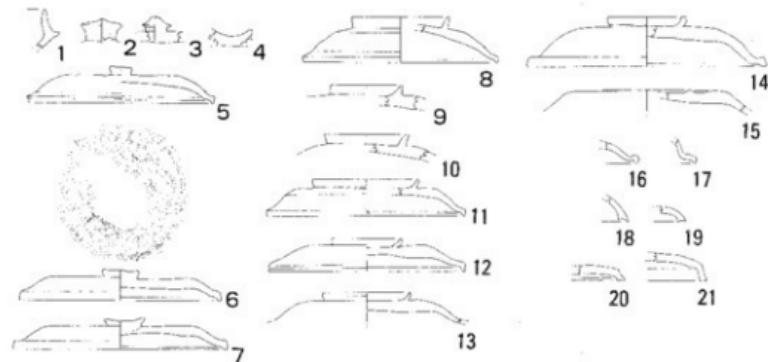
内外面に凹凸がみられる。49は、口縁部内外面と体部外面にヘラみがきと考えられるもののがみられる。胎土には砂粒はほとんど含まれず、焼成も極めて良くしっかりしたつくりである。口唇部はやや平坦面となっている。50は、ていねいなつくりである。51は、口唇部外面端部に明瞭なアクセントがついている。52は、器形等不明である。図示以外に円筒埴輪のタガに似たものがあり、他の土器とは胎土が全く異っている。有段の高环片や高环の筒部・底部片がみられた。

以上は、弥生時代後期から古墳時代初めの時期に入るるものと考える。

参考文献 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』『出雲・石見』1992年

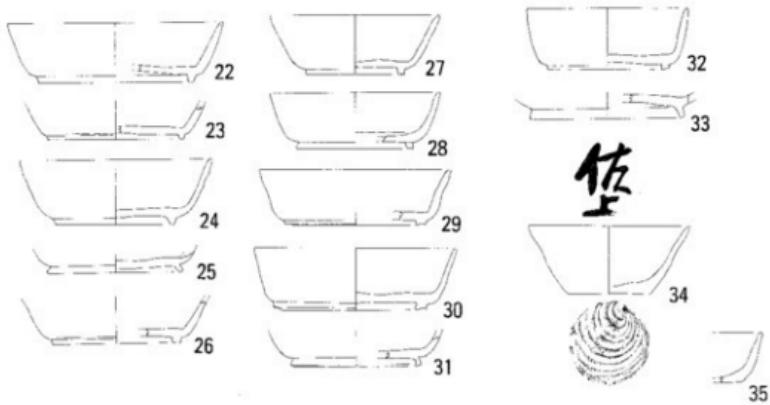
須恵器（第22～25図）

1・2は、D区から出土しともにていねいなつくりである。1は、6世紀後半に属すると考えられる。2は、灰かぶりがみられる。3は、D区東部から出土した。偏りと灰かぶりがみられる。4は、D区から出土し偏りがみられる。5は、B区から出土し全体に灰かぶりがみられる。ていねいなつくりである。内外面とも回転なでがみられる。6・7は、C区加工段状造構02東部から出土した。6の内面は、回転なでの後刷毛なでをしている。口唇部外面は、やや凹となっている。7の天井外面は、粘土紐痕の凹凸がみられる。同形のものが他に2点みられる。8は、D区から出土し均整がとれている。内面はなで仕上げをし、外面はケズリ後回転なでをしている。9は、C区から出土した。つまみ部分に歪



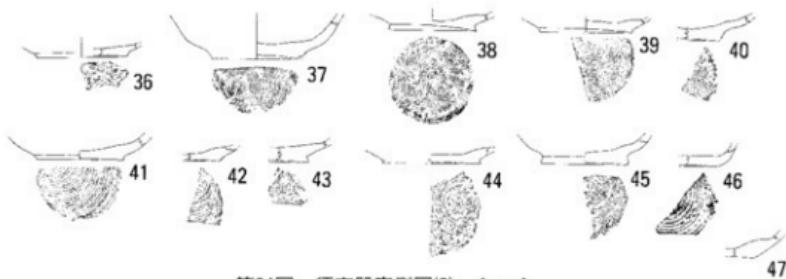
第22図 須恵器実測図(1) 1 : 4

みがみられる。10は、焼成がやや軟質であるがていねいなつくりである。11・12は、天井外面にヘラケズリがみられる。11は、6と同様の口唇部外面である。12は、つまみの接合部で割れと空洞がみられる。灰かぶりが少量と重ね焼痕がみられる。13は、つまみ外側にケズリとつまみ内側は回転なでがみられる。天井内面中心部は、雑な仕上げである。14は、つまみ部の端部処理は明瞭である。天井内面は、回転なで後部分的に横なでがみられる。天井外面に灰かぶりがみられる。15は、白色を呈し焼成は極めて軟質である。天井内面に粘土紐痕の凹凸がみられる。16～21は、D区から出土し21はC区溝状造構上層のものと同一個体となる。16は8の胎上とよく似ており、均整のとれた形を呈している。17は、灰かぶりがみられていねいなつくりで焼成はかなり良い。18は灰白色を呈し、19は青灰色を呈している。19は、ていねいなつくりで外面と口唇部内面端部まで灰かぶり状となっており天地逆転の可能性もある。20・21も天地逆転の可能性がある。22・23は、C区から出土した。22の口唇部はやや鋭い。23は整ったつくりで、同タイプで高台径の小さいものもみられる。24の高台内は糸切り後なでとみられ、高台外回りは雑な仕上げである。25の底部外面は、回転ヘラケズリがみられる。26は、溝状造構02上層から出土した。高台面に浅い凹面がみられる。27はしっかりしたていねいなつくりである。28の高台内面はヘラケズリがみられ、同タイプで高台径が大きいものが1点あり焼成は不良である。29と同形がもう1個体と口径がやや大きく高さはやや低いていねいなつくりのもの1点がみられる。30の高台内面はヘラケズリ後なで仕上げがみられ、高台外回りは仕上げが雑である。31の高台及び

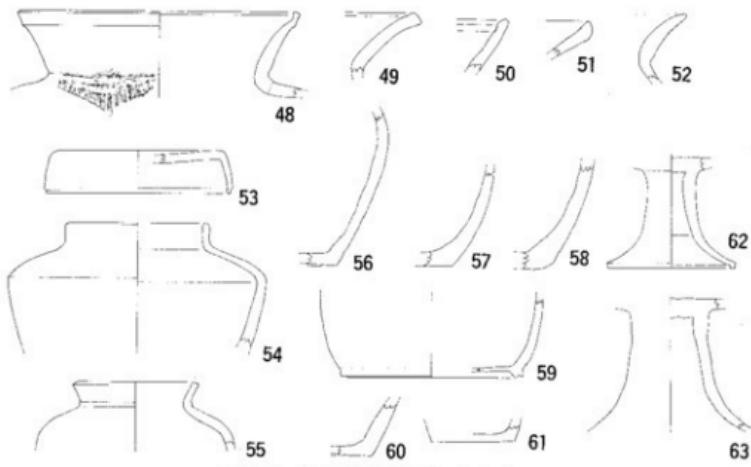


第23図 須恵器実測図(2) 1 : 4

高台回りは、径・整形ともに雑で歪みがみられる。32は全体にやや歪みがあり、特に高台部分に著しい。高台内はなで仕上げがみられる。33高台内面は糸切り、高台をつけた後回転がみられる。34はD区東部から出土し、墨書銘「佐上」が内面全面にみられる。35の胎土は、1mm大の砂粒を少し含んでいる。36はA区から出土した。他に比べ薄づくりである。37の内外面は、備前焼の「火だすき」がみられる。底端部にはみ出し、端部と体部の境は雑なヘラ削りがみられる。他はていねいなつくりである。38は、37・39とともにD区東部から出土した。焼成はかなり良く、底端部は37以上にはみ出しが著しく仕上げも雑である。39の焼成はややゆるく、微細砂粒を多く含んでいる。40はD区から出土し、底端部は部分的にはみ出し部が欠如している。底部から体部への境は、ケズリと見られる。底径8cm前後と推定される。41・42は、D区東部から出土した。41は、微細砂粒を多く含み底端部は雑な仕上げである。焼成はややゆるい。42の底径は、7cm前後と推定される。43の内外面は、「火だすき」がみられる。底端部は、未調整で不整形であり、底部径5cm前後と推定される。底部から体部への境は、ケズリが見られる。44は、43・45とともにD区から出土した。内面体部側は、灰かぶりがみられる。45は、1mm大砂粒を含み焼成はややゆるい。46・47は、D区東部から出土した。46は、糸切り後の余分な胎土を底部へ戻している。焼成はややゆるい。47は、底径8cm前後と推定される。1mm大の砂粒を少量含み、内面中央に灰かぶりがみられる。糸切りの痕跡はみられない。48は、D区東部から出土し全体に歪みがみられる。外面に凹線2条1対が2セット(?)、肩部内面はあて具の痕を荒くなめ消している。1mm大の砂粒を少量と3mm大の砂粒を数点含んでいる。49は、ていねいなつくりで焼成最も良い。口径は、23cm前後と推定される。50は、微細砂粒を多く含み焼成はかなり良い。内面に灰かぶりがみられ、口径は約22cmと推定される。51は、やや雑な仕上げである。52の外面には灰かぶりがみられ、口径は約21cmと推定される。53は、ていねいなつくりで外



第24図 須恵器実測図(3) 1 : 4



第25図 須恵器実測図(4) 1 : 4

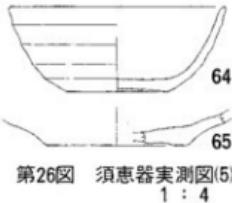
面に灰かぶりがみられる。天井外縁にケズリがみられ、胎土には微細砂粒が多く含んでいる。54は、ていねいでしっかりしたつくりである。胎土に1mm大砂粒を少し含み、外面肩部に蓋をかぶせて焼成した色ちがいがみられる。55の口唇部は、やや凹状になっている。胎土に1mm大砂粒を少量含み、外面の一部に灰かぶりがみられる。焼成は、最も良い。56の内面最大径部と外面最大径部以下に2箇所に繼ぎ目がみられる。内面には、当て木の痕跡がみられる。底部端外面は鋭く、体部側少し上にはやや鋭い凹線がみられる。胎土に1mm大砂粒が微量含まれ、器体内に部分的な空気孔がみられる。焼成は、最も良い。底径は約13.5cmと推定される。57の体部外面は、検出部の半分以下にケズリがみられ、さらに半分以下は斜めの刷毛調整がみられる。焼成は、外面はやや不良で内面は普通である。58の器壁は内外とも凹凸があり、胎土に1~2mm大砂粒を多量に含んでいる。外面底部端は、ケズリの後になで調整と推定され、底部はヘラ起しと推定される。59は器壁外側に凹凸がみられるが、全体としては整っている。同径同類で、器壁がやや薄く焼成の不良なものが1点みられる。60は、胎土に2mm大砂粒を数点含んでいる。底部内面は荒なで、外面はヘラ起しの後になでと推定される。体部外面はケズリである。底径は、約13cmと推定される。61は、胎土・焼成とも最も良い。62の焼成は最も良く、つくりも整っている。63はやや雑なつくりである。坏部上面は横なでに同下面は回転痕がみられる。筒部内面は、上半分に布痕があり絞りの痕もみられる。

64・65は、土師器に似ている。64は、微細砂粒を多量に含み、淡茶灰色を呈している。内面はなめらかであるが、外面はろくろ目が明瞭である。底部は糸切りである。つくりはしっかりしており、焼成も良好である。65は、微細砂粒と1mm大砂粒を含み、黄茶色を呈している。器種は不明である。つくりはしっかりしておりしており、焼成も良好である。

以上の時期は、64・65を除いて8・9世紀代のものと考える。1は、6世紀後半であろう。64・65は、中世土器に属するものと考える。

参考文献 「日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書」「日脚遺跡」 1985年

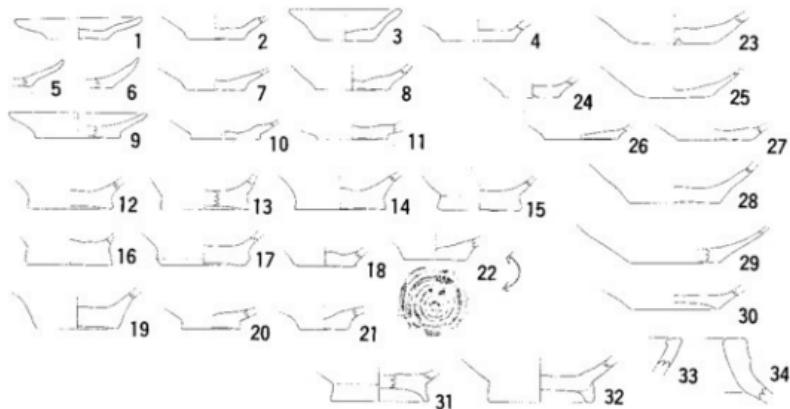
『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992年



第26図 須恵器実測図(5)
1 : 4

土師質土器（第27図）

1は、口径に歪みがみられるがていねいなつくりである。口唇部と体却との境、体部と底部との境に不明瞭であるが、変換点（線）がみられる。胎土に赤色粒を含み、焼成は良好である。底部は、糸切りとみられる。同タイプの小形のものと、口縁部がかなりていねいなつくりのもの各1点が、同一地区D区西から出土している。2は、底形がやや椭円形



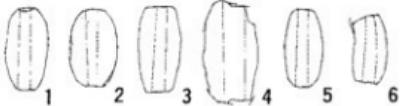
第27図 土師質土器実測図 1 : 4

を呈し、ヘラ切り後調整している可能性がある。胎土に赤色粒を含み、焼成は良好である。3は、2と同様でB区から出土した。4も2・3とはほぼ同様である。底部端に歪みがみられる。5・6は、D区西から出土した。5の口径、底径とともに不明である。口縁部と体部との境に稜がある。6は歪みがみられるが、底径は約4.2cmと推定される。7は、胎土に赤色粒を少し含み、焼成は良好である。底部内面にろくろ目が残り、底部は糸切りである。8は、外面暗白濁色・内面淡黒色を呈している。底部は糸切りである。同タイプで、底径約6cm、見込みがやや浅いものがある。内外ともに白濁色、糸切りである。9はC区東から出土した。灰褐色を呈し胎土に小赤色粒を含み、焼成は良好である。口唇部がやや角があり、底部は糸切りである。10・11はD区東から出土した。10は白濁色を呈し、内外ともに煤状のものが浸透している。底部は糸切りで、端部は鋭くはみ出しによる歪みがある。内面にはろくろ目がみられる。ほぼ同じものが3点、高台高さが低いもの1点、胎土が“さらし土”状で白色に近いもの1点がある。11も白濁色を呈している。底部は糸切りで、端部は鋭い。12は、胎土に赤色粒を含み、内面黄茶褐色、外側黄褐色を呈している。内面に4条のろくろ目がみられ、ヘラ切り後調整しているようである。しっかりしたつくりで、焼成も良好である。同様のものが数点ある。13はA区から出土した。赤色粒を含み、4と同一の胎土と推定された。底部端部はやや鋭い。底部の調整は不明である。B区に同タイプのものがみられる。14はD区西から出土した。茶褐色を呈し、焼成は極めて良い。内面にろくろ目がみられ、糸切りである。15はD区東から出土した。赤色粒を少し含み、明赤褐色を呈する。内面にろくろ目がみられ、糸切りのようである。底部端部に歪みがある。16はB区から出土した。赤色粒を含み、焼成は良好である。しっかりしたつくりであるが、底部端部は歪みがありはみだし等もある。内面のろくろ目が明瞭で凹線となり、ヘラ切り後調整をしているようである。17もB区から出土した。16とはほぼ同様の観察となる。底部端部は、やや凹状になっている。18はD区東から出土した。底部端部の整形は難で、糸切りと推定される。19はS I 0 1付近から出土した。赤色粒を少し含み、内面と底部は明赤褐色・内面は明茶白色を呈している。内面にろくろ目がみられ、ヘラ切り後調整をしているようである。底部端部は難で歪みがある。20はD区東から出土した。1mm大砂粒を微量含み、さらに赤色粒を含んでいる。形に歪みがあり、底部端部はやや鋭い。底部の調整は不明である。21はD区西から出土した。赤色粒を含み、しっかりしたつくりである。ヘラ切り後調整と推定される。22はE区から出土した。内面のろくろ目状の凹線は、鋭く明瞭である。極めて良好な焼成である。23はD区西から出土した。赤色粒を含み、外面はやや

朱色を呈している。ヘラ切り後調整と推定され、径に歪みがある。中央偏りの穴は、回転軸の痕跡とも考えられる。数点同タイプのものがみられる。24はD区東から出土した。内面にろくろ目がみられる。中央偏りの穴は、23と同様であろう。25はC区東から出土した。小赤色粒を含み、白濁ないし褐色を呈している。しっかりしたつくりで、底部は凸状である。26はB区から出土した。黄色を呈し、底部端部は鋭い。同タイプがもう1点みられる。27はD区東から出土した。赤色粒を数点含み、白濁色を呈する。糸切りである。28・29はD区西から出土した。内外面にろくろ目がみられ、糸切りである。やや小型が1点、赤色粒を含みもの1点等がみられる。29は、内面にろくろ目がみられ、底部はヘラ切り後調整しているようである。30はE区から出土した。底部調整は不明である。31・32はS I 0 1付近から出土した。31は、褐色粒を含み、焼成はやや不良である。内面にろくろ目がみられ、全体に歪みがみられる。32は、31とはほぼ同様であるが、高台内は糸切りで高台の付け方は雑である。33・34はA区から出土した。33は、淡黒灰色を呈し、胎土は黄褐色を呈している。焼成はやや不良である。傾き、器形等不明である。34は、1mm大砂粒を少し含み、焼成はやや不良である。外面は淡黒灰色ないし淡茶白色、内面は淡黄灰色を呈している。胎土は、淡茶白色を呈している。傾き、器形等不明である。

土錘(第28図)

1は表採である。灰白色を呈し、焼成は良好である。穴形は、図上側が丸・図下側が不整形な楕円形である。46.1 gである。同タイ



第28図 土錘実測図 1:4

プがD区から出土している。明茶白色を呈し、焼成は良好である。穴形は丸、約 $\frac{1}{6}$ 欠失している。46.1 gである。2はD区から出土した。灰白色ないし茶褐色を呈し、焼成は良好である。穴形は丸である。54.2 gである。3はD区東から出土した。淡黒色を呈し、焼成は極めて良い。穴形は丸である。両端は平らになっており、特に図上側は切断状となっている。53.75 gである。同タイプで約 $\frac{1}{2}$ 欠失しているものがある。黒色を呈し、焼成は良好である。30.5 gである。1・2と3の中間タイプがある。灰褐色ないし淡黒色を呈し、焼成は良好である。 $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{4}$ 欠失し、32.2 gである。4はD区東から出土した。淡褐色ないし淡灰色を呈し、焼成は極めて良い。 $\frac{1}{2}$ 弱欠失し、63.1 gである。両端はヘラ切り状と推定される。5はC区中央西よりから出土した。白濁ないし淡黒灰色を呈し、焼成は良好である。須恵質でていねいなつくりである。穴形は、図上側は丸・図下側はやや角ばっている。36.65 gである。6はD区東か

ら出土した。1mm大砂粒を多量に含み、白濁色を呈している。焼成は良好で、穴形はやや丸が歪んでいる。端部半分が欠失しているが37.25gを計る。

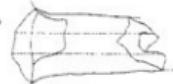
これまでこれだけの数量を検出した遺跡例はない。

特殊遺物

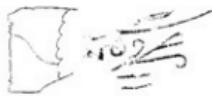
土製支脚・こしきの取っ手・かまと片・器種不明などをとりあげる。土製支脚は、双頭で背面に縦方向の扁平なつまみが付いたものがほとんどである。底部には、深さ1~3cmの凹部がある。高さ12.5cm前後、底径12.5cm前後のものと、高さがさらに高いものとがある。頭(支え)の長さは6cm前後である。つまみは、高さ3.5cm前後、厚さ2cm前後、長さ6cm前後である。C・D区東から出土している。類例は、本遺跡北約300mの半田浜西遺跡で出土している。こしきの取っ手は、各種多数C・D区東から出土している。かまと片はD区東から薄づくりでていねいなものと普通タイプで難なつくりなものが出土している。器種不明なもの(第29図)がD区S101東付近から出土した。灰白色ないし暗白濁色を呈し、丸い穴が貫通している。焼成は良好である。D区からは、取っ手の極部状のものがある。また、弥生時代後期に属する高環の筒部、凹線文がめぐり空洞がないものと推定されるものがある。E区からは、円筒埴輪のタガ状のもので焼成が著しく良好なものがある。

瓦

瓦片が5点出土した。軒平瓦(第30図)は、D区東の畠段端から出土した。中心飾をT字状にする均亜唐草文で、突線は断面三角形である。シャープな表現である。顎の形態は曲線顎である。凹面は横削り、凸面は縦削りがみられる。全面淡黒灰色を呈している。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、白濁色を呈している。焼成は良好である。同文は、浜田市の石見国文寺跡・下府廃寺跡から出土している。平瓦は3点出土している。2点は狭端部側である。厚さは22mmである。凹面は布目がみられ、凸部は繩叩きがみられる(1点不明)。1~2mm大の砂粒を多く含んでいる。焼成はやや軟質である。B区から出土したものは、内外は砂粒面である。厚さは19mmである。同様のもの1点が、半田浜西遺跡から出土している。丸瓦と推定される朱褐色を呈するものが1点出土した。厚さは16mmである。風化が著しく調整等は不明である。



第29図 特殊遺物
実測図 1:4



第30図 軒丸瓦実測図
1:4

石 器

C区とD区の東側から20点余りが出土した。2点以外は、磨石ないし敲石である。砂岩系の石材で元は矩形で約7cmある。1面の使用で長軸に対して約45°の擦痕がみられる。もう1点もほぼ同質でやや荒い石材で最も厚いところで約2cmである。下面をよく使用しておりやや凹面となっている。後世、片面は火を受けている。磨石は、全面を使用している場合と片面を使用している場合がある。敲石だけの使用はない。敲石としての使用痕は、長形の場合は両端ないし片端に見られ、丸形の場合は円周の極一部に見られる。

陶磁器

ほぼ全域の中層より上で検出した。輸入磁器は、全体の約30%以下の出土量である。白磁は、玉縁の碗が大半である。青磁は、微細片であるが少量出土している。日本製は、江戸時代後期の染付が約90%を占め、石見焼はあまり見られない。

IV ま と め

本調査は、遺跡予想範囲の約 $\frac{1}{2}$ を行った。その結果、北側と東側溜池部分が完全に破壊されていた。検出された遺跡は、堅穴式住居2棟・掘立柱式建物3棟・溝状造構4条・加工段状造構4所・階段状造構4所・柱穴群4群である。このうち時期が明確なものは、堅穴式住居(S I 01)が弥生時代後期から古墳時代初期と推定されるものだけである。もう1棟の堅穴式住居もこれに近いと考えられる。その他については、出土した遺物から中世のものとも考えられる。

遺物では、墨書き土器(須恵器)「佐上」が1点と下府廃寺跡・石見国分寺跡から出土したものと同様の軒平瓦が1点出土したことは特に注目される。瓦については、その意味が不明であるが、墨書き土器からこれらの時期に官との関連を考えることができよう。また、本遺跡の北側所在の半田浜西遺跡から風字覗の破片が出土している。このことからこの時期は、この付近が官との関連が強い所と考える。

江津道路建設予定地でこの付近の調査が実施されつつあり、これらと総合的に検討していくことによりこの地の歴史の解明に大きな前進があると考える。

図版



遺跡遠景
北西から



遺跡近景
北西から



同上
南東から



←半田浜西遺跡
遺跡前景
(北西)
南東から



検出後
西から



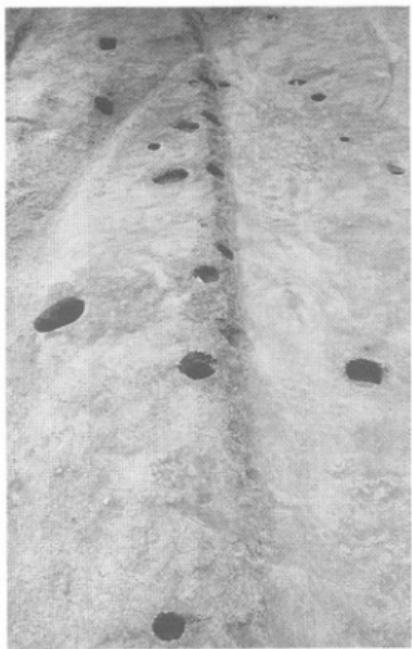
同上 西から



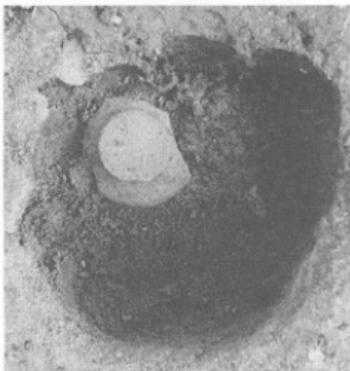
竪穴式住居（S101） 北西から



同上 北東から



掘立柱式住居 北東から



遺物出土状況（柱穴内 P 1）
北西から



西端柱穴群 北東から

石垣
B・C間
北西から



同上
溜池外壁裾
北西から



同上
D・E間
(中央)
北西から



同上
同上(西)
北西から



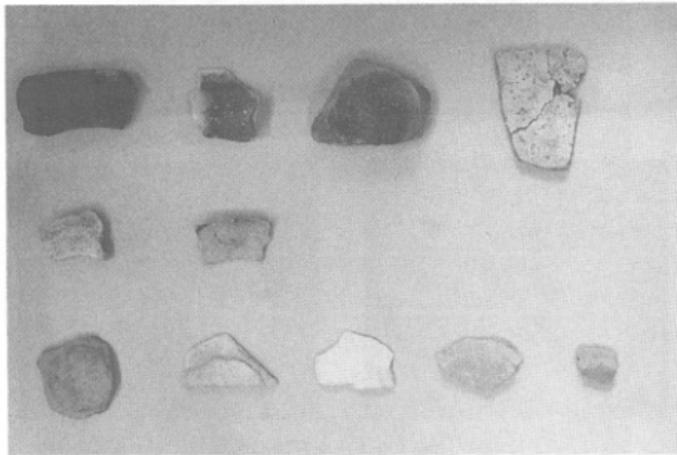
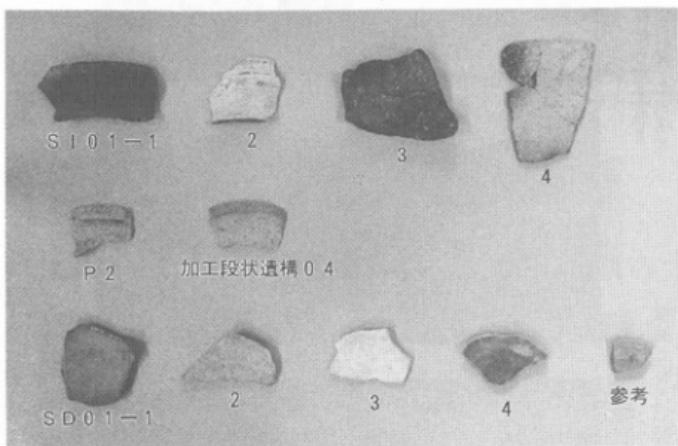


遺構検出作業



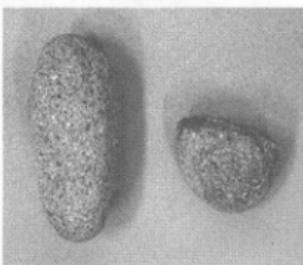
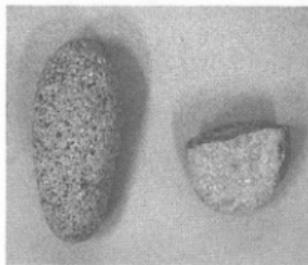
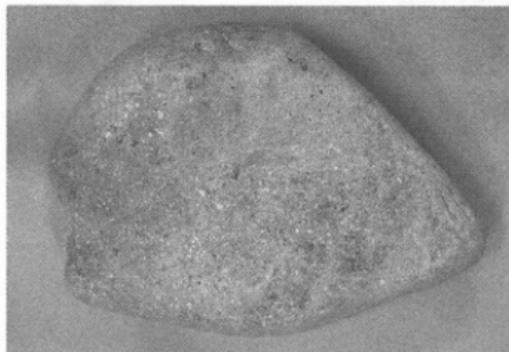
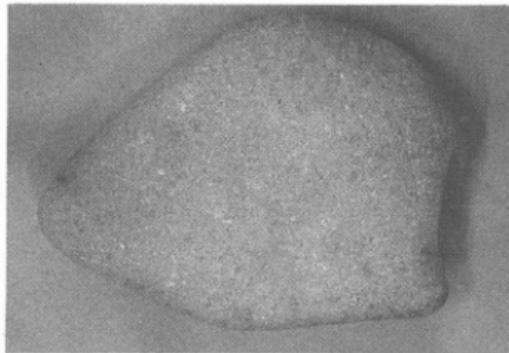
現地説明会

遺構に伴う出土品 I



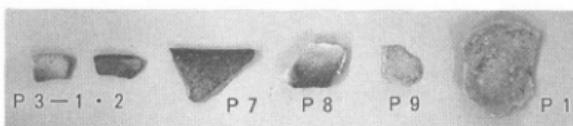
同 上

遺構に伴う出土品



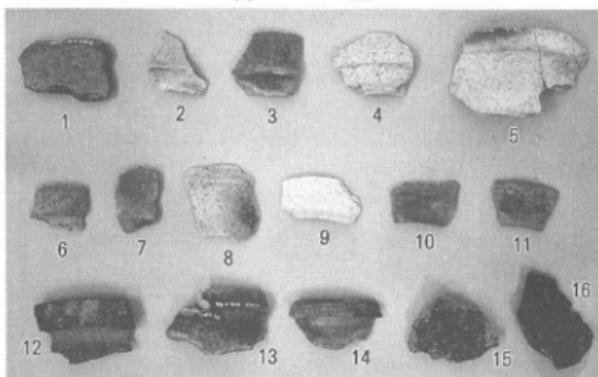
S 101 出土石器

遺構に伴う出土品Ⅲ



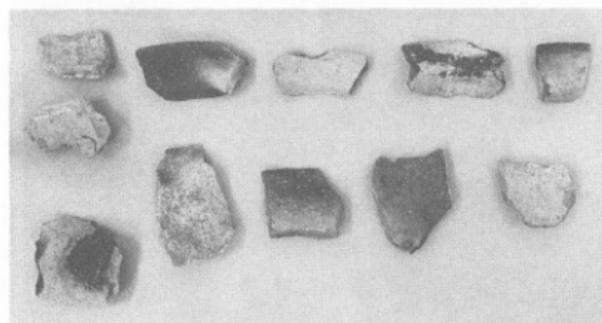
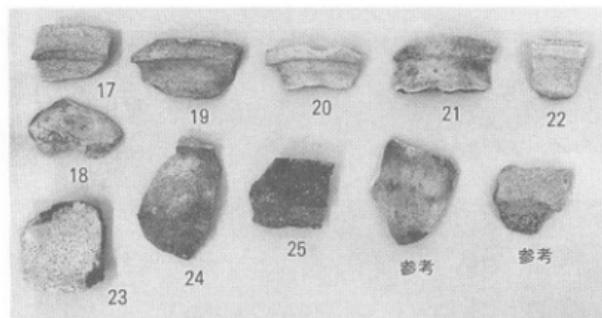
同 上

弥生土器・土師器Ⅰ

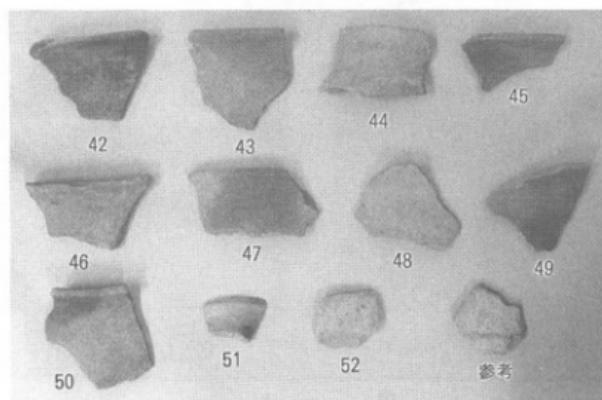


同 上

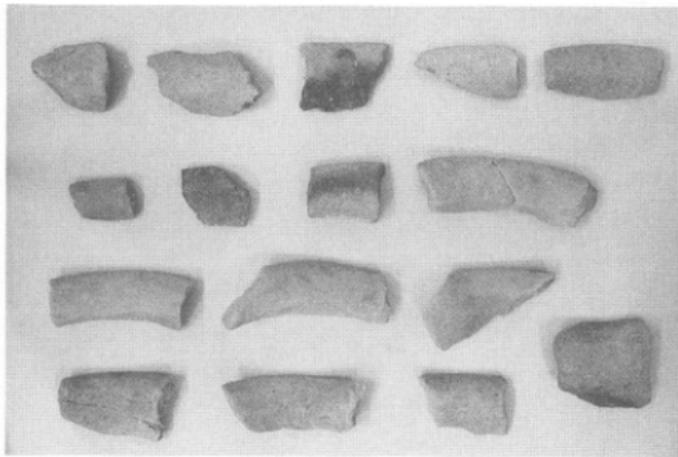
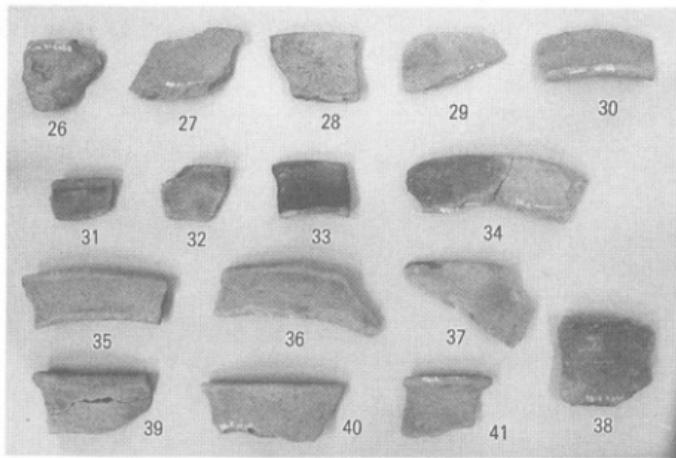




同 上

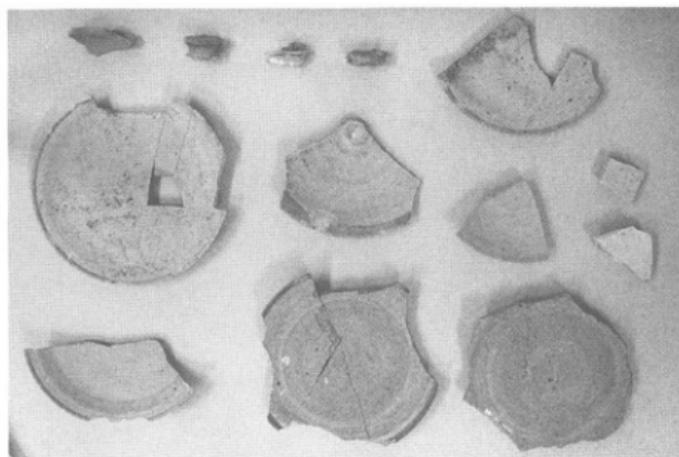
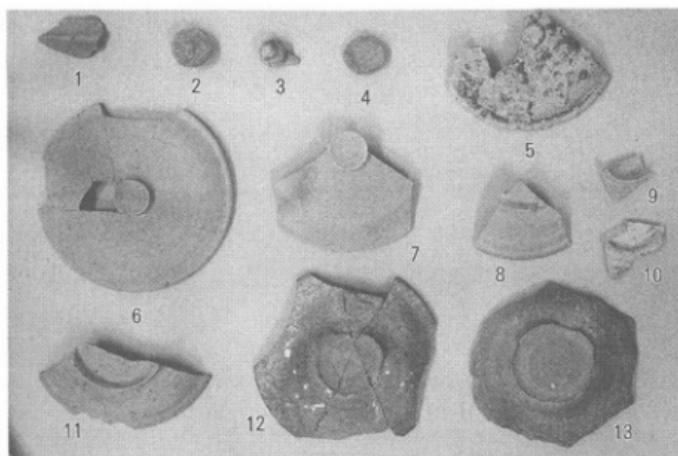


弥生土器・土師器Ⅲ

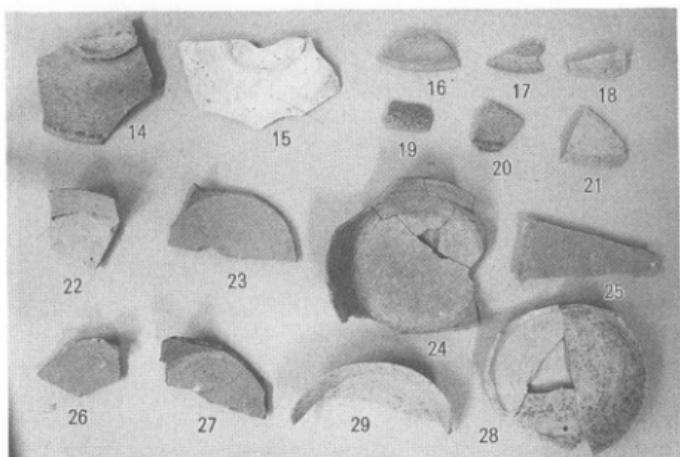


同 上

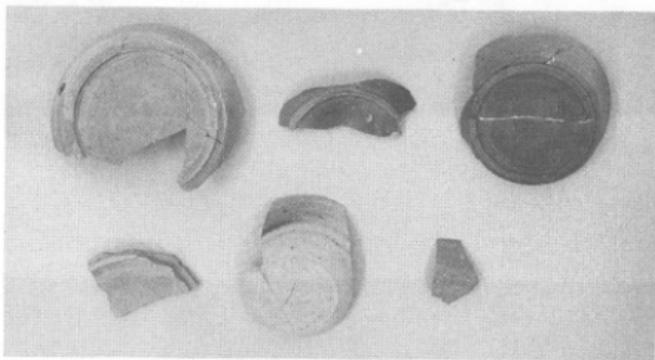
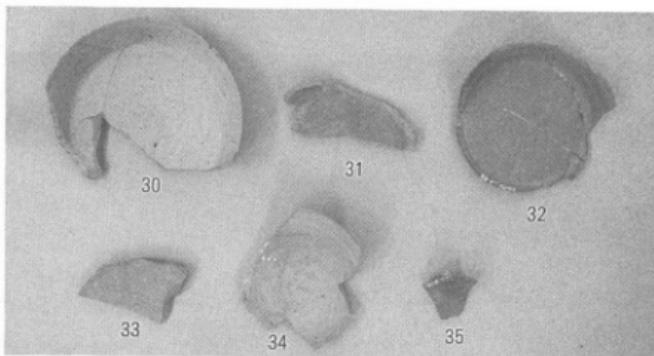
須 恵 器 I



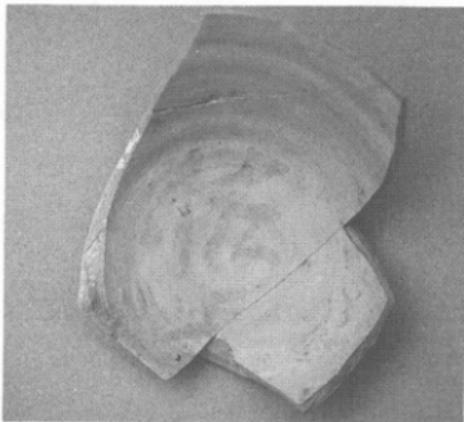
同 上



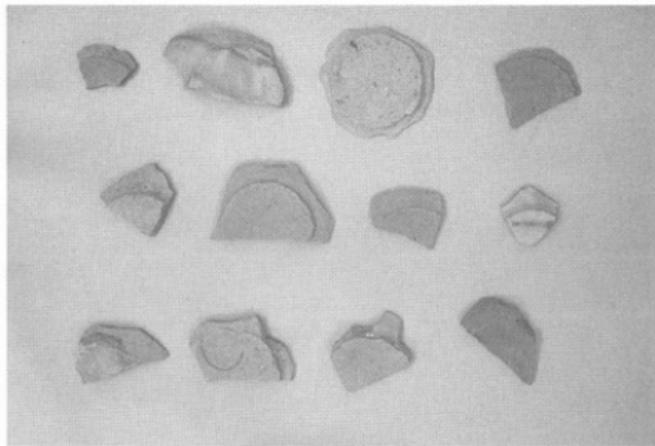
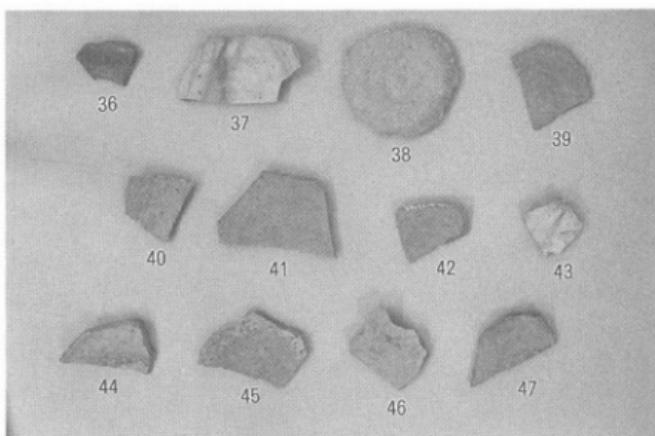
同 上



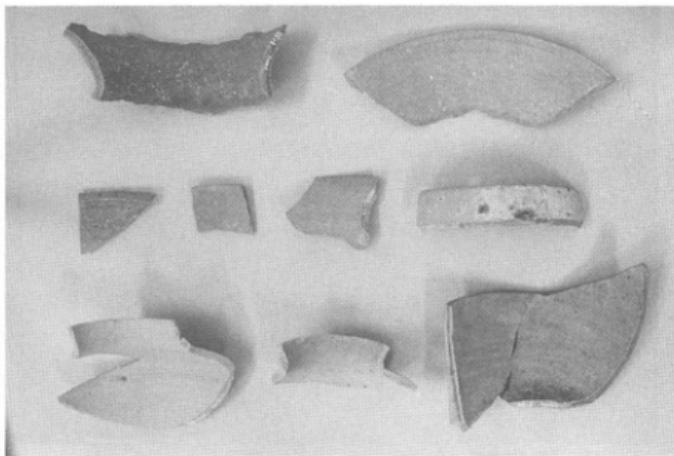
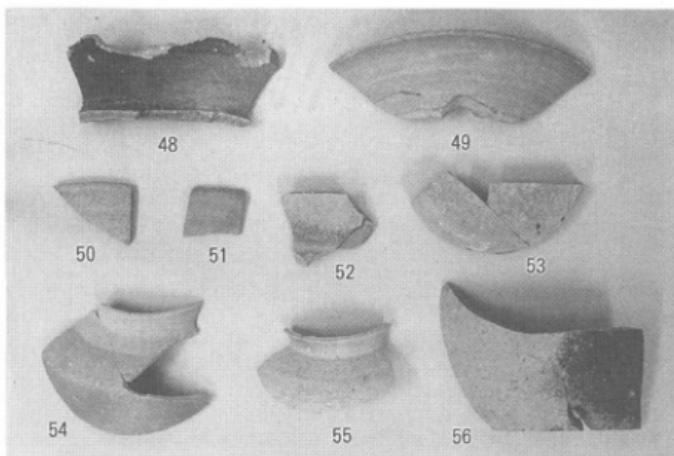
同 上



34 墨 書

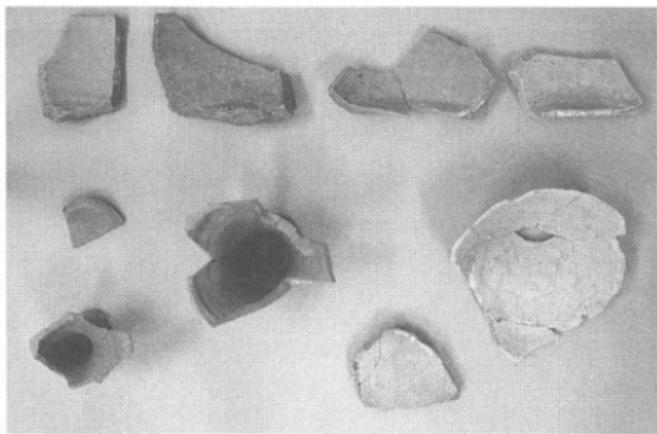
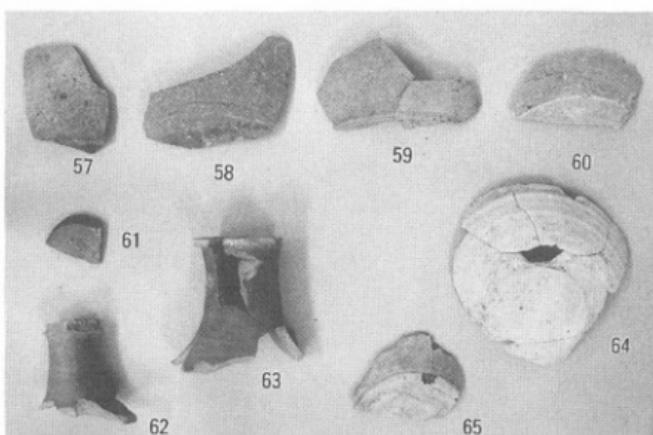


同上



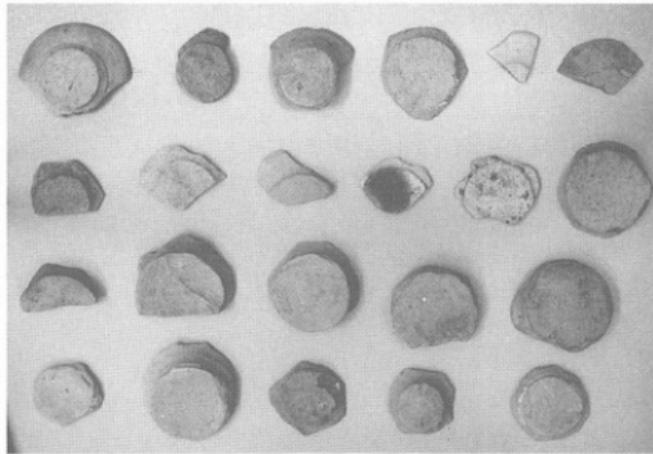
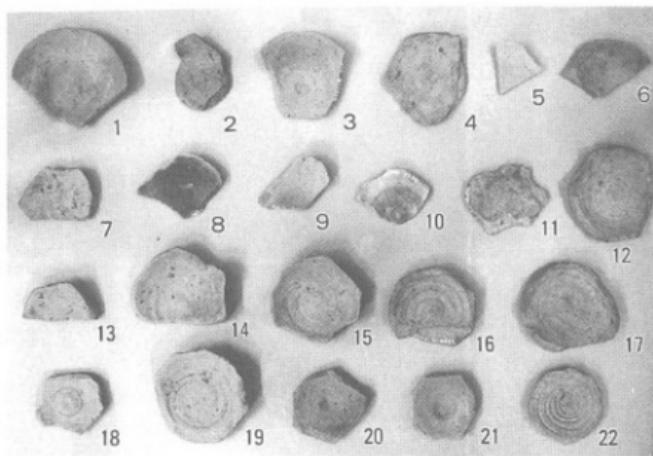
同上

須 惠 器 VI

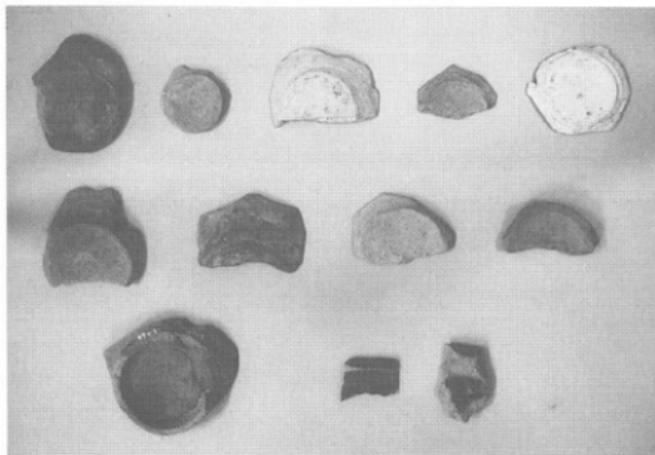
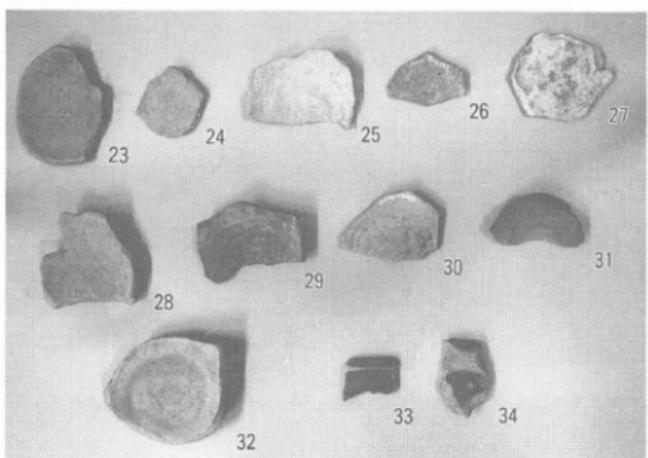


同 上

土師質土器
I



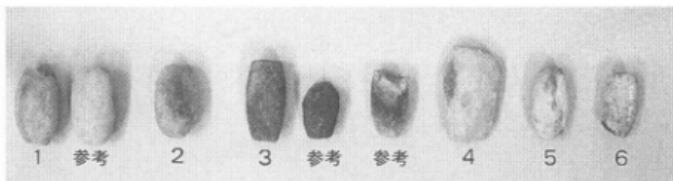
同 上



同 上

土

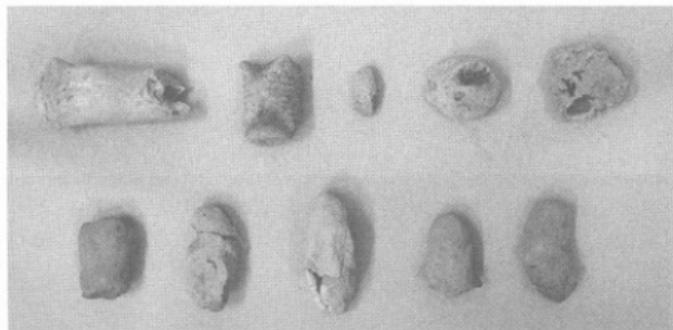
鍾



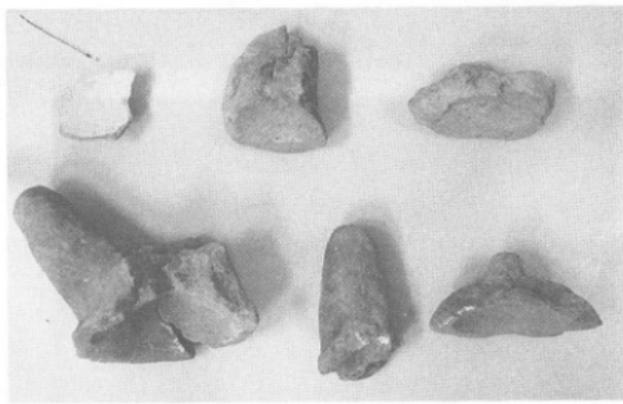
同上

特殊遺物

I



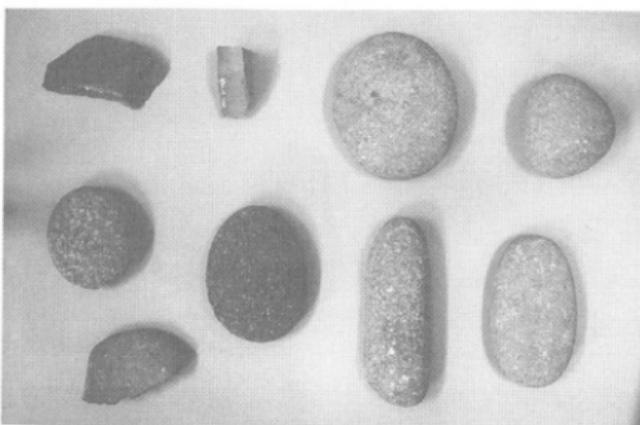
特殊遺物 II



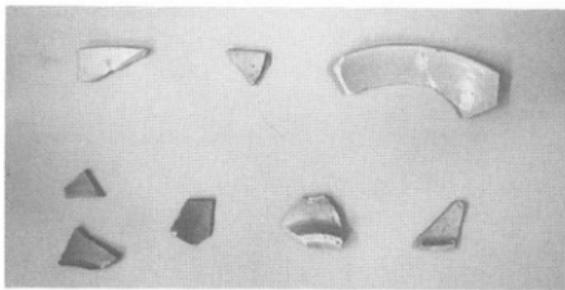
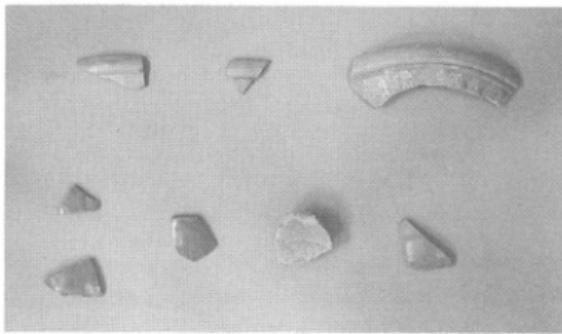
瓦



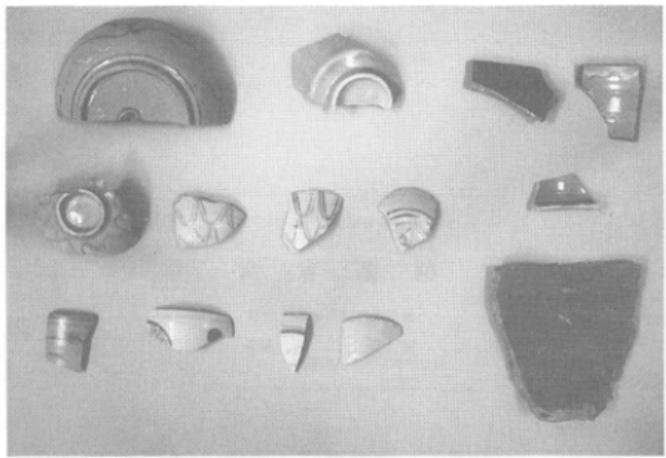
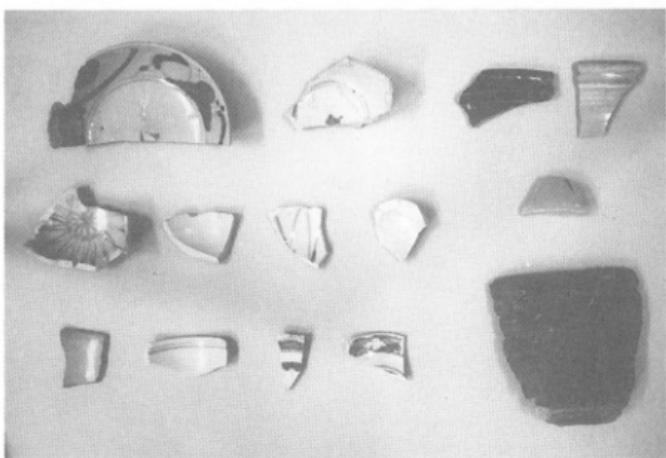
石器



皿
磁
青
磁



磁器・陶器



1993年12月24日発行

宮 倉 遺 跡

発行 江津市教育委員会

印刷 玉江印刷
鳥取県江津市江津町1110